

徒あり、翌六年三月上旬悉く落成し、同月十八日十九日新殿の舞臺に能樂を演じて諸士に觀覽せしめ、酒饌を賜はり、館名を竹澤御殿と稱した。蓋し竹澤の名は、齊廣の幼時その衣服器什を竹印と稱したると、この境内に金澤池あるとを合はせて作つた語であると言はれる。竹澤御殿は文政七年七月齊廣の卒した後廢せられた。

タケザハゴテンノカネ 竹澤御殿の鐘 ↓ トキガネ 時鐘。

タケシ 多氣志 ↓ タギシ 田岸。

タケシタウサブロウ 竹下卯三郎 諱は直久。藩士矢木久右衛門の弟で、本多氏の臣竹下半次に養はれ、中小姓組に班した。明治二年本多政均の暗殺せられた後、舊臣等復讐を謀り、卯一郎も之と事を共にせんと欲したが、同志は彼が素より家臣の出でなかつたから密謀を漏らさなかつた。既にして同志目的を達し、五年十一月四日自らを命ぜられたが、この日卯一郎は彼等の遺骸が未だ大乘寺に送られざるに先だち、主家の塋域に自及し、前田晋の舊臣進藤珍次郎介錯し、舊御歩河合八十之助介添をなした。

タケシタユキアツ 竹下之厚 通稱源兵衛。定番御歩から出で、文化十四年新番となり、文政五年新知百石を得て組外に列し、天保二年大小將組に轉じ、三年五十石を加へ、天保十年二月八日歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

タケシマドノ 竹島殿 ↓ キユウコウイン 求光院。

タケゾウ 竹藏 能美郡北市の一部で無家の地であつた。明治中には獨立の部落として取扱つたこともある。

タケゾノブンケイ 竹園文圭 石川郡松任の人。文化五年二月に生まれ、大坂の篠崎小竹の門に遊び、經史百家の書に通じ、又俳諧・和歌をも能くし、晩年周易を嗜んだ。明治十七年五月七十七歳を以て歿。

タケダ 竹太 鳳至郡諸橋郷に屬する竹原。太田川は、明治八年十月併合して竹太となつた。

タケダキンエモン 竹田金右衛門 隱居の後休意と號した。越後浪人であつたが、佐久間某が江戸からの歸途伴ひ歸り、慶長五年大聖寺の役に浪人で従軍高名し、次いで山田八右衛門に仕へて二百石を受け、後八右衛門の金澤を立退いてから本多安房政重に仕へて大坂前役に負傷し、後役には横山大膳康玄に屬して三百石を受け、首一つを獲たが又負傷し、前田利常から銀三枚・帷子三を賞賜せられた。金右衛門子なく、大場采女の庶子を養うたが、器量能きを以て利常に召出されて寵臣となつた。竹田市三郎忠種即ち是である。

タケダクランド 武田藏人 正親町三條大納言の子。前田利常に仕へ千百五十石を受けた。子孫相繼いで藩に仕へる。

タケダゴンベエ 竹田權兵衛 京都の能大夫。本姓秦。竹田氏とも金春氏とも稱した。寛永五年二月十日前田利常金春權兵衛に四百石を賜うたのを藩に仕へた初とする。爾後子孫歴世相襲いだ。

タケダゴンベエ 竹田權兵衛 諱は廣貞。加賀藩の祿三百石を受けて、金春流の能大夫であつた。廣貞當にその技に精しきのみならず、學問に深く、正徳四年歌舞名物同異抄を、享保元年徳華問答鈔を著した。

タケダタタネ 竹田忠種 初諱忠次。通稱市三郎。父は横山山城の家人竹田金右衛門忠明。實は村井長次の家臣大場采女の子で、風神俊邁、且つ器局があり、寛永五年前田利常に仕へて小々將に任じ、三百石を賜はり、後寵任を得て人持組に列し、前後増祿三千五百三十石となつた。利常の隱棲するに及び小松に従ひ、萬治元年その薨じた時、偶江戸よりの歸途に在つたが、信濃田中・屋代間に於いて凶報に接し、十月十九日四時小松に着し、侯の遺骸を拜した後、直に日蓮宗本成寺に赴いて履腹した。享年四十三。法號萬通院一玄宗鉄居士。

タケダタチカ 竹田忠周 通稱源太郎。掃部・市三郎。天明五年養父五郎左衛門忠順の遺知三千三十石を受け、定火消・奏者番・寺社奉行に任じ、文化十四年五百石を引足し、文政元年若年寄に進み、八年十月歿した。

タケダタハル 竹田忠張 初諱忠隆。字は知遠。五郎左衛門と稱した。父は市三郎忠種。萬治元年父の歿後襲祿し、寛文元年火消役となり、貞享二年奏者番に遷り、元祿十二年寺社奉行に轉じ、同年公事場奉行を兼ね、寶永元年病に罹つて罷め、翌二年正月廿五日歿した。忠張詩賦を能くし、連歌を好み、室直清・高巻昌興と親しかつた。

タケタテジンジャ 竹立神社 能美郡輕海に在つた。式内等舊社記に「竹立神社。輕海村鎮座。今稱竹立明神。舊社也。」と見える。明治以降武達神社といひ、尋いで輕海神社とし、昭和十五年又加須加美神社と改めた。

タケタトモノブ 武田友信 通稱金三郎。元治元年加賀藩の部隊長として、武田耕雲齋

等の西上を防ぐが爲に出陣し功があつた。葉原出張日記の著がある。

タケダノブオキ 武田信興 通稱秀平。播磨の産で、京都に居たが、加賀藩の老臣今枝直方がその多能なるを知つて、文化十一年之を金澤に迎へ、文政元年前田齊廣に薦めて藩の御細工者小頭並に任じ、十五人扶持を受けしめた。次いで文政二年新知百石を興へられ、組外に列し、五年竹澤御書院組として齊廣の隱棲に従ひ、七年その卒後再び組外に復し、弘化元年九月十一日七十三歳で歿した。信興は木彫に巧で友月と號し、その製陶には民山の號を用ひた。

タケダノブミチ 武田信道 通稱文次郎。木工左衛門。寶永元年父の配分知二百石を受け、御馬廻に班し、表小將から次第に昇進して、延享四年御小將頭に至り、二百石を加へ、寶曆元年四月十八日四十八歳を以て歿した。

タケダマサタ 竹田昌忠 通稱金右衛門。實は永原左六郎の二男。竹田源助の遺知三百石を襲ぎ、大小將となり、享保九年表小將に轉じ、元文五年表小將番頭、延享三年奥小將番頭、四年持筒頭を経て、寶曆四年大組頭となり、十三年免せられ、明和二年九月廿三日七十歳で歿した。昌忠は雲軒と號し、伊藤祐之に學んだが、その詩は誦するに堪へるものが少い。しかし和歌に在つては頗る得意で、その應教百首の如きは最も秀逸とせられ、木曾路の記の文もある。

タケチヨウ 竹町 金澤の舊町名。元祿九年の地子町肝煎裁許附に木、新保新町とある地であらう。明治四年四月戸籍編成の際、改めて木、新保四番丁とした。